

桃
峰



7 8 月 号

第3卷 第6号

通卷 第24号

鷺峰 目次 七八合併号

卷頭の言葉

組織の中に道心なし

立正安國と王仏冥合

特に創価学会の政治進出に関する

編集部

4

心靈と精靈（その一）

沢田覚象

12

一妙無象蘇生万象

刀 蘭義昭

6

お題目の実践者と傍観者

反響をよんだ卷頭言

30

虚空隨想滴々

川島本良

主として法華經靈山虛空会に關して

身延の近郊に

日諦上人の名瀑をたずねて

秋元忠

醒悟園本妙庵行学研修中

信仰相談室

信仰の緊張感

日高白象

おことわり

編集後記

48 45

46

39

31

表紙題字……身延山法主藤井日静猊下
表紙写真……インド靈鷲山へ渡つた身延山金剛の釈尊像

表紙印刷……大阪東洋印刷社長藤原秀憲氏寄進
カット……みどり教報提供

道心なし

「道心の中に衣食あり。衣食の中に道心なし」

これは伝教大師の有名な言葉です。世の中には宗教家に限らず在家の人々の中にも、へ衣食が足りてから信仰しようへ金と暇とが出来たら信心でもしてみようとか、甚しきに至つては、へ信仰を世渡の手段にするのも止むを得まいとかへ現世利益のない信仰があるものか、どうせ信仰するなら、もつと金もうけの出来る信仰をしたがよいゝといつたような考え方をもつてゐる人々が少くはありません。然し、そうした人々にとつては、伝教大師のこの言葉こそ、まさしく頂門の一針でありましよう。日蓮大聖人も、

「仏法は体なり。世間は影なり。体まがれば影なぐめなり」

と仰せられていますが、正しい道心を、正しく奮い立たせることろ、衣食は自ら整つて来るものであつて、衣食を先決にするところ道心の起りようはなく、若し道心があつたとしても、即座に歪曲され、何時しか失なはれてしまうのです。

最近、日蓮宗門内においても組織ということが盛んに強調され、特に宗門青年会運動では必ずといつてよいほど組織が論議されています。去る八月二十九日、三十日の二日間、九州において日蓮宗全

組織の中に

国青年大会が開催されました。それに先立つて、本誌先月号を通じて、

「宗門青年は僧俗をとわず、一人残らずウチワ太鼓を持て。そして少くとも春夏秋冬の年四回でも地域的に街頭を擊鼓宣伝せよ」

ということを提唱しました。この提唱が大会において採り上げられたかどうかは、寡聞にして知ることを得ませんが、それにしても大会では、相も変らず青年組織ということが論議の中心をなしてい

たということです。

組織、それも結構なことです。然しその前に、もう一度、伝教大師の言葉をふりかえつてみる必要がないでしょうか。本誌は、そうした組織主体の動向に対し、次のように提唱したいと思います。

「道心の中に組織あり。組織の中に道心なし」と。

釈尊も一人でした。大聖人も一人でした。そしてそれに集う本化の僧伽は、仏法僧の三宝の中の僧宝として仏国土を現成していたのです。仏国土の核ともいわれるべき本化の僧伽は、組織によるものでなく、一に久遠の本仏釈尊を本門の本尊を仰ぎ、本門の題目を但信口唱する本化の菩薩の、はからわざる和合によるものであつた。

立正安國と王仏冥合へその一

特に創価学会の政治進出に關して

編集部

本稿は去る七月二十日

兵庫県尼ヶ崎市に身延山

布教別動隊が街頭布教を

展開した折、これを主催

した長遠寺（住職池田博

隆師）における講演会に

おいて、別動隊長日高白

象師が二時間有余に亘つ

て糸子吼した講演の骨旨
である △編集部▽

て糸子吼した講演の骨旨
である △編集部▽

驚異的な進展をとげた創価学会が
王仏冥合というスローガンをかゝ
げ、その組織を母体として政治に
進出しあはじめ、今や公明党とい
う政党までも結成して、地方選挙は
もとより、中央の衆議院、参議院
の議席拡大をめざして虎視タンタ
ンとしている現状は、宗教界・政
教戦術と、軍隊的組織力をもつて

界・財界をはじめてとして、今や

天下の注目を集めるところとなつて來ていますが、その政治進出が

あまりにもめざましいものであるだけに、その政治運動の根底となつてゐる王仏冥合という思想そのものに対しても、充分なる検討、批判を加えておく必要があると思

います。

然し、王仏冥合ということは、戰後、創価学会がはじめて言い出

したことではなく、既に日本佛教史上、古くから有つたものであつて、その歴史をさかのばれば、仏教伝来の当初にも見出されるものであり、爾米この思想は、どの時

代においても、形を変え、表現を変えて、盛んに主張されて来たものなのです。

もとより王仏冥合ということは王法（政治）と仏法（宗教）とが冥合することであります。この王仏冥合思想なるものは、仏教伝来以降、今日、創価学会において重ねて宣説されるに至るまでの千数百年來の歴史の中には、或は時代を指導（或は歪曲）するため、或は時代に追従（或は迎合）するため、種々に色を変えて来ており、冥合という言葉は同じではあっても、その言葉の巧妙さ、或はアイマイさをペールにして、



去る7月20日尼崎街頭布教の際
長遠寺に到着した布教隊

境内二重之塔は重要文化財

1、王仏が主で、仏法が從

2、仏法が主で、王法が従

3、王法と仏法とが同じ比重

というように、内容は甚しく異にして来ているのです。

たとえば、奈良・平安時代にあつては、文化国家建設のない手として鎮護国家を標榜し、戦国乱世の時代にあつては、政権獲得、維持の道具となり、特に江戸時代にあつては、キリスト教を看視せんとする「宗門改め」という幕府の宗教政策（その代表的なもの）が寺院の植家制度であり、僧侶は月経と称して毎月植家を廻つて町民を看視したことが、今日なお形式的に残つてゐるのですが）

つて明治以後にあつては、軍国主義に便乗して戦争を鼓吹し、宗派教団は競つて戦斗機を軍部に献納するというような、今日では考えられない愚かしげなことが本氣でなされており、また国会の田中智学居士に至つては、その生涯を通して國家と宗教（国体と法華を通じて国家と宗教（国体と法華經）の結びつきに狂奔し、本化聖典大詳林の編纂等の功績は大にし

こうした歴史的な流れの中にあつて、王仏冥合思想の代表的なもの一つをあげれば「王法為本」ということがあります。

このことについて浄土真宗の存覚上人は、破邪顕正抄の中で、

仏法・王法は一雙の法なり。

鳥の二つの翼の如し。車の二つの輪の如し。一つも欠けては不可なり。かるが故に、仏法をもて王法をまもり、王法をもて仏法をあがむ

と述べており、また浄土真宗中興の祖と仰がれた蓮如上人も、殊に、外には王法をもて表とし、内心には他力の信心を深くたくわえて、世間の仁義を

ほどの汚点を残しており、そうした生々しき事実は、今日なお記憶にも新たなものがありましよう。

2

そうちした宗教政策の大となり、降

先とすべし

とも、或はまた、

王法を本とし、仁義を先とす

べし、

とも主張しているほどです。

蓋し、こうした考え方は、明か

に仏法と王法とを両比重とみなして

いるものですが、然し、国家的

色彩の強くなつた時（國家非常の

時代）にあつては、勢い両者のバ

ランスは崩れ、王法為本へと傾き

勝ちなことなのです。

それは淨土真宗のみに限らず、

一般宗教界においても同様であり

特に日蓮宗門にあつては、本来国

思想の横行したことは、軍國主義時代はいうまでもなく、その因は既に古く、その大勢は、日蓮大聖人滅後百年の頃に、さかのぼるところが出来ると思ひます。たとえば朗門九老僧の第一人者である龍華日像上人の、そのあとをついた妙実上人が、雨乞いの奇瑞によつて、朝廷より日蓮大聖人に大菩薩号、日朗上人と日像上人に菩薩号、そしてみずからは大覚といふ称号と大僧正という官位を

このことは開宗六百五十年を記念する、宗門をあげての大慶事の行われた大正十年十月、日蓮門下各宗が一体となり、政界の木内重四郎、軍部の東郷平八郎等の有力者の助言によつて、朝廷より日蓮大聖人に「立正大師」の称号が宣下されたこと、更には昭和五年大聖人滅後六百五十遠忌を記念しこれを契機としてか、これまでの国家諫曉を主とした立正安國運動は、その本旨より逸脱して、政治と宗教は、鳥の両翼、車の両輪といふ式の王仏冥合思想へ転落して行く宗風を作つてしまつたのではなか、とさえ思はしめられるものがあります。

と、全く軌を同じくするものです

が、然し、こうしたことが果して大聖人の祖意にかなうものであつたかどうか、深く反省しなければならない要があると思います。宗教が政治的権勢や財力、そうした俗権によつて箝をつけようとしていること自体、既に堕落したことであり、それを無批判に喜んだりしているようなことでは、宗教の権威は地におちたのも同様と申せましよう。もとより、これによつて宗教本来の使命が失われて行くことは論をまつまでありません

いて、次のように門弟を強く説められていました、

天台・真言の学者等、怠仏・禪の檀那にへつらい恐るゝこと、犬の主に尾をふり、鼠の

猫をおそるゝが如し。

国王・將軍に官仕え、破仏法の因縁、破國の因縁を、よくよく語るなり、

はき違えた王仏冥合思想とその動向は、全く、破仏・破國の因縁でしかありません。

これは權門に迎合することを強く後世にまで説めた一例であります。しかし、かくしてこそ宗教の純粹性が堅持されるのです。

伝えるところによれば、文永十九年、大聖人は、幕府よりおくられかえりりますれば、大聖人は開目鈔の下巻の、結びのあたりにお

それでも朝廷は、是非とも受領するようにと、道元の弟子を勅使として、衣を送りました。弟子はうやくしくその衣を師の道元へたてまつりました。

た蒙古調伏の御教書と、法華經弘
通の允許状、ならびに一千町歩の
美田を領する愛染堂別当職任命の
辞令をも一蹟して、白雲深く身延
の山へ分け入られたということです
が、こうした大聖人の行き方か
らすれば、火師号や勅額を奉戴し
たり、或は宗門歴代の高僧の中に
は、朝廷より紫の衣を拝戴したこ
とを一代の名寺に思つていた人々
も少なからずいたようですが、然
し、そのようなことは、一見、王
仏冥合の一環として喜ばしいこと
のように思われもししましようが、
実は、立正安國の祖意に遠ざかる
も甚しき、あやまつた行動である
という批判に堪え難きものと申さ

れましよう。

創価学会の標榜する王仏冥合思
想とその動向もまた、かかる宗門
七百年來のあやまつた流れの中に
現在、大きく浮びあがつている同
類の泡沫でしかないともいえるの
です。

伝え聞くところによれば、創価
学会の總本山である富士の大石寺
には、宗教による國家統一のあか
つき、天皇・皇后の台臨を仰ぐ玉
座まで既に用意されているといふ
ことです。このことはナンセン

どわし、こけおどすも甚しいこと
と一笑にふするよりも、愚民をま
つては、それなりの典拠がなければ
なりません。

その典拠というものは、いまで
もなく日蓮大聖人の御遺文と称せ
られて来た「三大秘法鈔」の中の
國立戒壇建立に関する一節にほか
ならないのです。

へつづく

になつたことは、日本佛教史上、
曾つて類もなかつたことです。

然し創価学会が、あやまれる王

仏冥合思想にもとづくとはいえ、
宗教と政治とを同一次元にみて、
直接両者を冥合せしむるところに
彼等なりの理想世界をえがき、こ
のため宗教団体がそのまま政治團
体と化し、國家統一へ向つて、ひ
た走りに走るようになつたことに
ついては、それなりの典拠がなけ
ればなりません。

その典拠というものは、いまで
もなく日蓮大聖人の御遺文と称せ
られて来た「三大秘法鈔」の中の
國立戒壇建立に関する一節にほか
ならないのです。

心 霊 と 精 霊

へその一▽

「」の恐るべき靈的現証の事実

沢 田 覚 象

物語の中の大野富士夫さん

私は昭和三十九年の春、鷺峰会の第一期生として身延山大学を卒業した一人でした。

卒業後、私がおこなつたことは既に本誌でも発表されましたので

とでした。

正公さんで有名な、熊本の本妙寺をふり出しに、身延山まで車にも乗らず、炎暑をおかして、およそ五十口ばかり擊鼓行脚し通したことをやり通した時の喜びというものは、一年たつた今日さえ、なお

読者の中には、なお御記憶もあらざること、と思いますが、その年の夏、同期生三名と共に、九州の清

その道中の苦しさ、そしてこれ

生々しく、思い出すだにも新たな
勇気の、全身に吹き上げて来るの
を覚えるほどです。

この行脚修行の後、手のひらを
かえすように私は、街頭布教の第
一線より退いて、人里遠く離れた
山の中の、滝にこもりました。

その滝というのは、私の故郷で
ある京都府福知山市の、町はずれ
山城趾より、更に奥へ分け入った
山腹に、渓谷を切り開いて造られ
たものです。

この滝を開いたのは、実は私の
父なのですが、父は長年かゝつて
一人で、コツ／＼と滝場を築いて
行きました。

それは、私の母が、母に頼つて
来た信者さんをつれて、修行のため、
汽車に乗つて、遠く能勢の妙
見さんの滝まで、かよつていた不
便さを除くためでもありました。
滝が完成し、そのままそばに、
信徒の丹誠によつて、雨露をしの
ぐに足るだけの参籠堂（といつて
も小屋にも等しいものですが）そ
れが出来上つた頃、それは私の大
学卒業を目前にひかえていた時の
ことでしたが、父がにわかに亡く
なりました。

まるで父は、今生最後の仕事と
して滝を造つたようなものでした
七十有余年の父の生涯の中には、

僕の中でも大親分とうたわれた、
はなやかな時代もあつたそうです
然し、それにしても晩年のこの
滝造り、それは、たとえ小さな滝
ではあつたとしても、法華經以外
の如何なる宗教にも、また如何な
る医学にさえも教わることの出
来なかつた多くの、無辺の人々の
ために、曾つての建築業者として
背おぼえの腕をふるい、老骨に鞭
うちながら、一人コツ／＼と岩を
碎いて、造りあげて行つた此の滝
場こそ、父が今生に残した最高傑
作であり、私たち母子のために残
した不滅の遺産ともなつたもので
した。

曾つて建築業者として、丹波の遊

父は亡くなりました。然し滝は

残りました。その滝に、私はこも
りました。

参籠中、日高上人が関西布教の

折、足をのばして、わざ／＼訪ね

て来られることも屢々でした。

その中、日高上人の筆による宝
塔が三基、滝場の入口に建てられ
ました。一つはお題目の宝塔、一
つは「妙法之滝」という名の刻ま
れた宝塔、そしてもう一つは、私

の母が感心によつて口走る「ヤシ
ヨウリュウオウ」という言葉にも
とづいて日高上人が、根本仏教の
教えである

「正見・正思・正語・正業・正命
・正精進・正念・正定」
という八正道にちなんで、「八

正龍王」という滝の守護神の名を

選名して、刻んだ宝塔でした。

その折、宝塔のお題目を書かれ
た幾枚かの中の一枚を、信徒の浜
小三郎さんが頂いて、先祖の墓地
に無縁仏の供養塔を建て、家族を
あげて塔の下に法華経の一字一石

を納経したことから、不思議な靈

瑞が起つたこともありました。

奇瑞といえば、参籠中の滝の中
では、不思議な靈的現象が始終起
つていきました。

誰も滝にうたれていないのに、
滝壺の中から、朗々たるお題目の
声が聞えて來たり、黄金の色のサ
ン然たる金龍の姿が見えたことさ
えありました。それは決して幻聴

・幻覚といった類のものではあり
ませんでした。

そして信徒が滝にうたれる時、
その都度、想像することも出来な
いような物凄い靈的現象が続発し
たものでした。

2

私の大学卒業論文は、

「久遠の本仏と法華経の守護神」
と題するものでしたが、この研
究には在校中、日高上人から嫌と
いふほど、「本仏信仰と守護神信
仰の關係」をたゞきこまれて來た
はずでした。

然し参籠中、現實にみせつけら
れた靈的現象のかず／＼は、どう

てい机上の勉強すらも、間尺にあ
おうとも思われ難いほど、物凄い
ものばかりでした。

前にも述べましたように、私の
母を頼つて来る人々は、何処の医
者にも、何処の祈祷師にも見限ら
れ、見守された病人や、気狂い
の類といったような人々が少くは
ありませんでした。

彼等は、「弱れる者はワラをも
つかむ」という、警えながら、
こゝを先途と、自分の命の最後の
頼みの綱とすがつて来ては、私
母と共に滝に入つて、一心不乱に
お題目を唱えつゝけました。

すると、必ずといつてよいほど
神がかり的な憑依（ひようえ）状

態となり、のろわしい、いまわし
い靈の言葉を口走りながら、のた
うつのです。

それは、迷信・淫祠邪教と否定
し去られるような、信仰の底辺に
うごめく動物的姿でした。

私は、見るに見かねて、思わず
口をおき、へドを吐きたくなる
ような思いをしたことも、再三の
ことではありませんでした。

然し彼等は、社会人としての地
位も、人間としての恥も外聞を打
ち立て、救われたい一心で、一
たびことに私は、

「正しい信仰とは一体なんだ！」
と、拳をにぎつて天に叫びたく
つかり良くなり、修行を通して体

ながら、喜々として山を下つて行
くのです。

神の愛・私の慈悲、そして深遠
な教理・教学を説く崇高な宗教に
さえも救われなかつた人々や、現
代科学の粹をつくした医学にも見
放されていた人々が、丹波の山の
中の、小さな滝における原始的な
修行、その修行の中での、タクず
つた神がかり的な憑依状態を通じ
て救われて行くという……こうい
う生々しい現証の事実を目撃する
たびことに私は、

そして大学で学び、卒業論文で研究して来た仏教の教え、法華經の教え、日蓮大聖人の教えというものを、こうした底辺信仰にまで引き降して、もう一度、考え方をねばならないことを、つくづく痛感させられた此の一年間の参籠生活であったのです。

もとより日蓮大聖人が開目鈔の中で、

たとい山林に文つて
一念三千の親をこらすとも
空闊にして

三密の油をこぼさずとも
時機を知らず
摺折の二門をわきまえずば
いかでか生死を離るべき

感させられた此の一年間の参籠生

と認められていることは、百も承知しています。生死一大事の因縁を解決することは、末法濁惡の世における逆化折伏伝道の中にこそ見出されるものであつて、山林寂靜の幽境にあつて、禪三昧に入つたり、秘密祈禱をこらすことによつて、見出されるものではありません。

界をたゞえつゝ、同時に下は地獄界をも供養し救済する法華經の偉大さを誇感することによつて、再び街頭に擊鼓宣令する時こそ、私の真実の布教の姿が見出されると思つたからです。

3

次に、私が滻に参籠中、目撃し

た靈的現証の事実を、二・三かゝげて読者の信仰の御参考に資することにいたしたいと思います。

但し、これから文中、登場する信徒の氏名と職業は、職場において本人にさしつかえが起ることと思われますので、敢て仮名とさせて頂くことを、前もつてお断り

しておきます。

死靈と水虫

それは昭和三十九年の晚秋十一月の末、母が妙法講の信者さんたちをつれて、身延山から池上本門寺へと団参した直後のことでした。信者さんの一人である大野富士夫さんが、道場にお参りして、茶の間で、来あわせた信者さんたちと雑談していた時、ふと、

「私は水虫では随分長い間、悩まされて來た。医者でなおらないものなら、信仰で何とかならないものだろうか」

と漏らした。

大野さんの勤務の内容は申しあ

満州へ渡り、翌る十六年、満州の湿地帯で悪性の水虫にかかり、以来毎年、両足の水虫を切開手術し、一センチも深くガーゼをつめてはウミをとり出すことを繰り返しながら、戦後の今日まで、なお少しもよくならず、これまで千人以上の医者を取りかえでは、手術をつづけて來ていたのです。

この間、毎年六月の声を聞くと勤務先きでもゾーリばきとなり、七月に入るとゲタばきとなり、秋の冷い風が吹き出して、やつと靴がはける、といったような状態ほどでした。

大野さんがゾーリばきで出勤し出すと、職場では、「そろ／＼夏がやつて来る」といふ、ゲタばきで出勤し出すと違ひはありません。その中でも、社会風紀を取締るために外を歩くことを主とした任務でした。

「そろ／＼暑くなつて来る」

といへ、靴ばきになると、

「また冬がやつて来る」

と云われたものでした。

大野さんの足裏は、昭和十六年以来二十数年間、千回以上も手術して、なお、なおらない水虫のため、まるで化物の足のようになつていました。

私たちが、九州の熊本から身延

山まで歩き通した時の足裏も、豆の上に豆、そのまた上に豆が出来

足裏の皮は、まるで動物のそれの

ように厚くなり、しかも皮のゾー

リでもはいているかのように、足

から足裏の皮がはみ出で、ふた日

したが、大野さんの足も、またそ
うでした。

大野さんは法華経入信の動機と

して、戦慄するような恐い現証

から、九死一生を得た尊い信仰体

験をもつてゐる人なのですが、そ

れにしても、水虫を信仰でおす

め、まるで化物の足のようになつ

といふことは、実は思いもよらな

かつたことでした。

「若し水虫を根治する治療法を発

見することが出来たら、それこそ

ノーベル賞なのだ」

といわれているほどだそうです

然し、毎年／＼悩まされる水虫

に、ホト／＼情けなくなつてしま

つた大野さんが、思わず、

「これが信仰でおせるものなら
なあ」

と、つぶやいてしまつたのも無

理からぬことでしょう。

この時、そばに数名の信者さん

がいました。その中には大野さん

の言葉に同情する人もいました。

また、

「信心くらいで、水虫なんか、よ

くなるものかね」

と一笑にふす人もいました。吹

き出す人もいました。

「水虫の神様でもいらっしゃるな

らネ」

とゲラ／＼笑い出し、腹の皮が
痛くなるほど笑いころげている人
もいました。さすがに大野さんも

苦笑していました。

この時、私の母も、そばにいましたが、母は、そうしたさわめきの中にあつて、そつと合掌し、静かに冥默していました。そしてフ

「大野さん、供養して御覽」

と申しました。皆あつけにとられました。水虫を供養するということは、今まで聞いたことがなければ、考えもされないことであつたからです。

「水虫の供養をするんですよ」

と、また母が申しました。

「水虫の供養をするんですか？」

大野さんは、いぶかしげに尋ねました。

苦笑していました。

「そうです。水虫の病状を起している因縁の靈がいるから、その靈の供養をするのです」

きつぱりとした母の言葉に、大野さんをはじめ、そばにいた信者さんたちも、やつと納得することが出来たようでした。

然し、これにして、も靈のさわりが、水虫といふ適症を起させるものでしようか。若し起させるとすれば、それは如何なる靈のさわりなのでしようか。

「大野さん、それは貴方の御先祖の靈なのです。貴方の御先祖の墓地には、土葬された御先祖さまがおられるはずです。土葬された御先祖さまは、決して一人ではないでしよう。昔の田舎のことですかね自身の体にまつわる、二十数年來のことなのです。大野さんは無氣味な思いで、恐る／＼のこと

を母にたずねました。

「その靈は、どういう因縁の靈なのでしょうか？」

並み居る信者さんたちも、今まで捧腹絶倒していた人までも真剣なまなざして、母の語り出す言葉に、耳をそばたてゝいました。

母は答えました。

「大野さん、それは貴方の御先祖の靈なのです。貴方の御先祖さまがおられるはずです。土葬された御先祖さまは、決して一人ではないでしよう。昔の田舎のことですかね自身の体にまつわる、二十数年來のことなのです。大野さんは無氣味な思いで、恐る／＼のこと棺桶に入れるのに、体がグラ／＼

するので、体を荒縄でしばり、し
ばつたまゝ棺桶に入れて、つい、
縄をほどくことを忘れたためか、

ほどくことが出来なかつたためか、
そのまま土葬してしまわれた御先
祖さまがおられるはずです。

その御先祖さまの靈が、しばら
れた苦しさからのがれるために、
大野さんの体にたより、その結果

一年中ジメ／＼とした病症、水虫
という病気が起つてゐるのです」
聞き入る人々は、ゾーと鳥肌の
立つ思いをしたことでした。

土葬された遺体は、もう何十年
もたつてゐるのですから、おそらく
腐り果てゝ土に帰つてゐること
でしょう。そしてその遺体を、し

ばつたまゝとなつてゐた荒縄も、

腐つて影も形もなくなつてゐるこ
とでしよう。

然し、荒縄にしばられたという
靈の苦しみの一念は、たとえ体や
縄が腐つても消えず、靈は、その
苦しみからのがれるために、何年
も何十年もの間、悶え苦しんで来
たのです。

地中に埋められた土葬の棺桶の
中の、ジメ／＼とした苦しみ、そ
れが、靈に頼られた大野さんの体
の上に、ジメ／＼とした病症とし

てあらわれ、水虫という病名とな
つてあらわれたということについて
ては、考えられないことではあり
ません。

大野さんは、その靈を供養する
方法をたすねました。母は答えま
した。

「もう縄は腐つて、影も形もない
かも知れません。然し靈は、目に
見えない縄にしばられたまゝ苦し
んでいるのですから、まず第一に
たとえ形はなくとも、形なき形の
縄を切ることです。」

「それは、どうすればよいのです
か？」

大野さんは必死の思いでたずね
ました。

「何もむつかしく考えなくてもよ
いと思います。縄は腐つてなくな
つてしましても、切るのは形の
上の縄ではなくて、靈の苦しみの

一念の中にある縄なのですから、

御先祖さまをしばつた当時に思い

を返して、その一念の中の縄を切
ればよいのです」

「何で切るのですか」

「何で切る……切れるのは刃物し
かかないでしよう。よく切れる刃
物です。一枚十円の安全カミソリ

の刃でも縄を切ることは出来ます
よ」

「然し、土葬したお墓は沢山あり
ますが、それを一つづく堀り返え
してみるのですか」

「その必要はないでしよう。どう
せ、もう縄は腐つて形もないこと
でしようから、縄を切るつもりで
お墓の前の土の中に、安全カミソ

リの刃を埋めればよいでしよう。

然し、それだけでは靈は救われ
ません。長年の間、知らなかつた
とはいえ、御先祖さまの体を縄で

しばつたまゝ放置していた子孫の
罪を心から懺悔して、千枚のお題
目を写経し、施餓鬼供養をするこ
とです」

大野さんは、さつそく家族ずれ
で御先祖のお墓にお参りしました

そしてお花やお水をそなえ、用意
して來た十数枚の安全カミソリの
刃を、一枚ずつお墓の前の土の中
にいけ、心から靈に対して、これ
まで縄をほどかずに苦しめていた

お墓ごとに一枚ずつカミソリを
いけたのは、どのお墓が、例のお
墓であるのか、判らなかつたから
でした。

その後、大野さんの家では、学
校へ行つてゐる子供までが一緒に
なつて、千枚のお題目を写経しま
した。

この写経供養のことは、実は日
高上人より教えて頂いていたこと
で、妙法講の信徒は誰でも、毎月
一度は行つてゐることですが、半
紙を十六分の一に切つて、その紙
を小さな紙塔婆と思つて、一枚に

一題目、写経するのです。

間もなく千枚の写経が出来、そ
れをもつて私の道場で施餓鬼供養

・唱題しました。

をいとなみ、道場の前に流れている河に、供物と共に写經のお題日を流しました。

そして流し終つて、河原から道場へ帰りついた途端、何ということでしよう、大野さんの両足の皮が、そうです。今が今まで水虫のために、さう立つた化物のようになつて、足裏の皮が、ひとりでにガバツ／＼ガバツ／＼とむくれ始めたのです。

それは全くセミがスケガラからぬけ出るようなものでした。

私の母も、大野さんも、大野さんの家族の者も、そして居あわせた妙法講の信者さんたちも、大野さんの足裏の皮のむくれて行く様

を奇異の眼でみつめています。

やがて人々の眼は、何時しか感涙にぬれています。さすがに大野さんも、あふれる涙をハンカチでおさえていました。

昭和十六年以來二十数年の間、千回以上の手術をうけながらも、

おらなかつた水虫の足が、今、たゞ一度の靈供養の功德によつて奇跡的によくなつて行つているのです。

私たちは誰一人として、今さらのように靈供養の現証のあらたかさを痛感せずににはおられないことでした。

今年になつて大野さんは、六月の声を聞いてもゾーリばきになら

ず、七月に入つてもゲタばきにもならず、靴をはいて、颶爽と勤務についています。

そして大野さんの足裏をみて、へこれが水虫で悩んでいた足かと氣づく人は一人もいないほど美しくなつています。

以上は精靈（死靈）による靈的現証の一例ですが、次は大野さんの法華經入信の動機となつた心靈（生靈）の、生々しい靈的現証、そしてそれが職場全体の大問題とまでなつた実例を紹介することにいたしましよう。

一妙無象蘇生万象

お題目の実践者と傍感者

北九州大雄寺 刀禰義昭



1

「ダンダン／＼／＼／＼」

一尺三寸の大きなウチワ太鼓を
打ち鳴しながら、身延山街頭布教
隊の学生僧をひきつれて日高白象
上人が、北九州市八幡の龍済寺を

びます。

ノツシ／＼と歩く巨獣、やさし

い細い目……巨象を想わしめる白
象さんのウチワ太鼓に、そして白
象さんをめぐる驚峰会学生僧のシ
ンボルとも思われるウチワ太鼓に
は、墨痕あざやかに、

「一妙無象 蘇生万象」

別動隊と刀禰義昭上人(中央)



今年の二月のこと、龍蔵寺で、

その読み方を、

「妙ハ無象ナリ、万象ヲ蘇生ス

……と読むのですか」

と尋ねたところ、

「まあ、そういう意味ですね。私

は、そのままイチミヨウ、ムショ

ウ、ソセイ、バンショウといつて

います」

と、ボツンと答え、だまつて、

何時までも私の顔を、あの細い目

でみつめ、口もとに微笑をたまえ

ていました。

2

今年の正月、インドの国では、

ダラ・クリシナン大統領をはじめ

インドの高官が王舍城に集つて、靈鷲山を中心とする王舍城仏蹟復興の会議が開かれていました。

丁度その折、日本からインドへ渡つてゐる日本山妙法寺の一行が

多宝山頂へと、法鼓の音も勇しく

お題目を高らかに唱えながら通つて行きました。

その音響を聞いた大統領クリシ

ナン博士が、

「これこそ宇宙を制する大音響で

ある」

インド独立の父マハトマ・ガン

ドーが唱えたお題目を、ガンドー

亡き後は、その命日に、ネール首

相をはじめとするインドの指導者

たちと共に、お題目を唱えて、ガ

ンジーを追悼して来ました。

クリシナン博士は大統領として

のみならず、インド哲学にも造詣

が深く、音響学にかけては世界一

流の学者であります。ロンドンのケンブリッジ大学から、クリシナン博士の講義を聞くため、わざわざ特別に送迎の飛行機を仕立てるくらいの音響学の権威者です。

クリシナン博士はインド独立運

動の当時から既に、みずからお題

目を唱えていました。

インド独立の父マハトマ・ガン

ドーが唱えたお題目を、ガンドー

亡き後は、その命日に、ネール首

相をはじめとするインドの指導者

たちと共に、お題目を唱えて、ガ

ンジーを追悼して来ました。

インドには数千万のお題目を唱

える民衆がおります、そしてネー

ル首相も既に亡く、我が身はインドの最高指導者として、インド統一復興の第一歩として、「インドの復興は、釈尊の仏蹟復興から……」

と、国家をあげて王舎城復興の大聖業に着手せんとする今、感嘆も新らしくお題目を聞いて、



多宝山頂の仏舎利塔定礎式に
参列し合掌唱題する
クリシナン大統領（中央）

「この南無妙法蓮華經の音声こそ
は、宇宙を制する大音響である」と
と感銘深く語つたということです。

宇宙を制する大音響とは、単に
イング一国を制するのみでなく、
世界全体を制するのみでもなく、
また全人類を制するのみのもので

ある一切の万象をよみがえらせ、空
間的には十方虚空無邊にひろがり
時間的には過去、現在、未来と三
世無限にわたつて蘇生せしめる宇
宙調和の大音響です。

これは釈尊が、如来大悲門の秘密神通之力をこめて末法万年に留めおかれ、日蓮大聖人が一期の身命を賄して弘通されたものでありその南無妙法蓮華經といふ妙とは「蘇生の義なり」

と大聖人みずから仰せられているのですから、今さらクリシナン

もありません。

人間も動物も植物も、家庭も社会も国家も、お金も品物も、言葉も主義も思想も、ありとしあらゆる

博士の言を待つまでもありません

が、蓋し、クリシナン博士の言葉は、音響学といふ近代科学の立場から、お題目の音響の偉大さを立証することによつて、更に教尊の教え、日蓮大聖人の教えの尊さを普遍したものといふことが出来ましよう。

3

今年の正月、私は白象さんより贈られた一妙無象のウチワ太鼓に祈りをこめて、寒修行に張り切りました。

△我が唱うる一音（いつとん）の妙法は、形はなけれども、人類に平和をもたらす唯一至上の釈尊の

言靈（ことだま）である。△

△無明の者には仏知見を、弱き者には勇猛心を、不安の者には安心を、怒り多き者には忍耐の力を、貪欲の者には布施の心を与えしめる蘇生万象のお題目である。△

△願くば、我が唱うるところのお題目が、迷える亡魂にも悪鬼、惡靈にも、仏知の光明を与えしめたまえ。△

△太鼓をうつて、寒中の街頭に修行しました。すると、或る日のこと、信者である或る店の娘さんが、

4

△実は、そのお店の娘が嫁に行つて妊娠しました、ところが娘の主人が、

「これは心ばかりのものですが、お上人さん、御自由にお使いになつて下さい」

と塵紙に包んだお賽錢を持つて

きました。後で改めて見ると、お賽錢には多すぎる五千円札が一枚四つにたゝまれていました。△

△これには、きっと誤があるに違いない。△

△そう思つた私は、翌日、娘さんのお母さんに誤をたずねてみました。お母さんは、次ぎのように物語つてくれました、

というのです。

主人というのは、苦労した立派な人物なのですが、なにぶんにも

十一人兄弟で、このため随分苦労もし、子供の多いことには、うん

ざりしていたのです。そこで結婚

早々に子供を持ちたくはないと思つて、

「堕ろせ」

というし、娘は娘で、

「いや絶対に生む」

と言い張つて、意見が対立していました。

主人は船に乗つてゐるのですが

たま／＼今度、中共に航海するこ

とになり、

「どうしても堕ろせ」

と言い残して出航してしまいま

した。

そこで娘は、実家に帰つて、胸の中のモヤ／＼を、店の人たちと一緒にになつて、ヤケ酒でも飲んで

晴らそうと思ひ、

「五千円ほどおこりましよう」

ということになりましたが、その時、お母さんが申しました。

「ここでヤケ酒をのんで、ワーツ

ときわいでみたところで一時的な

こと、解決にはなりません。それ

よりも何か考へることはないだろ

うか」

ほれ、お題目の太鼓の音が聞えて来る。貴女が子供を生みたいのなら、お題目を唱えて、真剣にお

祈りをしてござらん。きっと誠心の

祈りは、主人の心に通ずる、と私は思うよ」

て、一妙無象のお題目の太鼓の音

が聞えて來ました。

「そうだ」

お母さんは膝をうつて申しました。

「一番大事なことは、貴女の主人

が、子供が可愛い、早く子供が欲しい、という気持ちになつてくれる

よう、貴女が祈ることではない

だらうか。

励まされた娘さんは、

「そうしよう、一生懸命にお祈りをしよう。この五千円のお金は、お題目に功德をつませてもらいましょう」

ということになつたのでした。

5

→妙無象のお題目には、蘇生万象の功德があります。一音のお題目が五千円の淨財を生み、この淨財で私は、さつそく五本のウチワ太鼓を購入しました。

ヤケ酒となつて消えるはずであ

つた五千円のお金は、「一妙無象蘇生万象」と記された五本の子太鼓と生れ

代りました。

その後、一ヶ月ばかりして中共

から帰つた主人は、四国・大阪を経て九州入りをしましたが、おみやげに差し出した金比羅さんのお守りを、よく見れば安産のお守り……主人は申しました。

「出発の時、墮ろせ、なんてことを、お前に強く言つて出たもの、航海の途中で気が変つた、このお守りは金比羅さんで特に御祈念してもらつて來たものだ。どうか無事に立派な子供を産んでくれ」

娘さんが涙を流して喜んだこと

は申すまでもありません。娘さんは太鼓がもたらした蘇生万象のお題目によつて、お題目の子を産む

べく、今、太鼓腹をかゝえて謙虚な祈りをつゝけております。

娘さんが主人をうらむことをやめて、主人の上に祈つた時、ヤケ酒にウサを晴らそうとする三悪道の迷える凡夫から、けなげな女人菩薩と生れ代り、主人とおなかの子を教うのみならず、自分みずからも救われたのです。そしてお題目こそは一切を蘇生せしめる一大靈音であつたことを、身をもつて体験したことでした。

6

クリシナン博士がガンディーやネールの追従者、傍観者としてゞなく、インドの大統領という最高貴

任者の立場にあつて、インドの立

正安國運動の根源ともいへべき王

舍城仏蹟復興の実践者として、お

題目を聞いた時、

「これこそ宇宙を制する大音響で
ある」

と語つたということは、誠に深く
考えさせられる問題であります。

八日蓮宗の信者であるから、お題
目を唱えよう

△人が唱えているから唱えよう

という追従者、傍観者としての
お題目も、お題目に変りはありません
せん。

然し、同じ唱えるなら、実践者
として唱えたいものです。

「このお題目によつて自分の家を

興すのだ。先祖の菩提をともらう
のだ。国を安じ、世界平和樹立の

一翼にならうのだ」

或は、

「気の毒な人々のために捧げるの
だ」

という実践者としてのお題目を

唱える時、煩惱多き我が身が、何
時しか知らぬ間に、本化の仏子、
菩薩として蘇生せしめられている

のです。

申すまでもなく日蓮大聖人は、

法華經の行者、実践者でした。大
聖人滅後七百年、今日の宗門の法
灯は、追従者や傍観者でなく実践
者によつて護り伝えられて來てい

るのです。有名、無名を問わず、
△人が唱えているから唱えよう

無量無邊の人々が身命を捧げて護
りぬいて來たのです。

このように思う時、

△私たちの先祖が唱えたお題目も

万象を蘇生せしめる大音響であつ
たんだなあ

△大聖人以来この方、宇宙を制す
る大音響が、十方虚空にこだまし
て來ていたんだなあ

△と、しみぐ思はざるを得ない
ことでしょう。

龍華寺青年会より発行されてい
る機関紙「龍華」は、そのような
一妙無象の実践的祈りの中から生
れました。そしてその功德は、読
者を通して万象を蘇生せしめて行

「妙無象、蘇生万象、その読み方はどうであらうとも、自分が祈りを持つお題目の実践者であるか

どうか、それが問題なんだよ」

白象和尚さんは、あの細い目で静かにほゝえんでいました。

△おわり△

反響を呼んだ巻頭言

本誌「驚峰」の記事は、しばしば日蓮宗新聞をはじめ各種の宗門機関雑誌に転載されたり、講演や

説教の資料とされたりしています

が、蓋し、今年の二月号における

「宇宙を制する大音響」

と題した△巻頭の言葉△ほど反響をよんだものはありません。

この大音響を取り扱つた刀禰義

華（八月号）より転載した

ものであることを附記します。

筆者は北九州市門司区

この原稿は、北九州市八幡

区祇園町龍潛寺立正青年会

より発行している機關紙龍

華（八月号）より転載した

ものであることを附記します。

庄司町大雄寺住職

△編集部△

すが、日本山一門では山主藤井日達上人が、再三に亘つて、この大音響を講演資料として講義されて

いるほどです。

身延の学生が電車の中で、この

頭巻の言葉をそつくりそのまま四

号活字で印刷されたチラシをもら

つてきました。聞けばこのチラシ

は関東と関西で、それ／＼何万枚

も印刷されて、一般の人々にも無

題する玉稿も、実は龍潛寺の立正

料で配布されているということです

した。文字通り大音響であつたわ

けですね。

虛空隨想滴々

八その二▽

法華經の靈山虛空会に關して

立正大學三年 川島本良

1



身延山街頭布教に參加した時の川島本良君

虚空会（こくうえ）とは、法華經第十一章の見宝塔品より、第二十二章の嘱累品に至る十二章、即ち釈尊が、靈鷲山の上の虚空において、説法された処をいうのであるが、この虚空会と、その前後の靈山会（りよせんえ）とをあわせて、通常「二廻三会（にしょさんえ）」といつてゐる。

このように、同じ經典でありながらも、その内容の如何によつて、時をかえ、處をかえて説法されるのは、獨り法華經々典のみに限つたことではなく、他の經典においても、屢々みられる類例であつて、仏陀説法の特色の一つにも数えられている。

こうした範例よりすれば、法華經二十八章を分類して解釈する場合、中國の天台大師が分類したように、前十四章を述門、後十四章を本門と分つた二分法もあることではあるが、それよりも、この「二処三会」にもとづく三分法の方が、はるかに自然な分類と思われる。

たとえば、第十二章の提婆達多品や、第十三章の勸持品、或は第二十章の常不輕菩薩品等は、法華經々典中、特に重要視されているところのものであり、就中勸持品、不輕品に至つては、日蓮大聖人一代の法華経色説史上、欠くべからざる最も大切な位置にありながら、その前後の関連性は、きわめて薄く、むしろおのれの独立しているかに思われる。

ところで虚空会中、完全なつながりをもちながら、且つ特別重要な内容をもつものは、

「第十一章の見宝塔品 → 第十五章の従地涌出品 → 第十六章の如來寿量品 → 第二十章の如來神力品 → 第二十二章の囑累品」

さて、この分類法によつて、その中心となつてゐる虚空会十二章の説法内容を通して、各章をふりかえつてみれば、

△十二章のすべてが、おの／＼順当に関連をもち、順序正しく、その位置が定められているのか？

というと、決して、そうとは限られていない。

といわれ、

日蓮大聖人は、

「宝塔品より事おこりて、寿量品に説き顕わし、神力品・囑累品に事きわまりて候ひしが」

「法師・宝塔に事起り、涌出・寿量に事顯われ、神力

リーグシャ）にかかる。いわゆる証前起後といわれる

・嘆累に事竟る」

という、いわゆる「起顯竟三箇の大事」とて、一往

多宝塔で、内より釈尊の説法を讚嘆し、その眞実を証

天台の五時八教の判決にもとづきながらも、再往そこ

明する多宝如来の大音声が、「ゼンザイ！ゼンザイ！」（善哉、善哉、よいかな、

から、更に発達した經典批判をされている。このこと

（）

は、

「法華經の肝要が、奈辺に説かれているか」

ということを、端的に解説したものであるといえよう。

2

この声を聞いた靈鷲山上の大衆は、

△是非とも、声の主である多宝如来（それは遠い過去に滅度した全身舍利の仏陀であるが）その姿を拝したい

と一齊に願う。

次に、虚空会十二章中における、各章の概要を述べてみよう。

第十一章 見 宝 塔 品

開巻劈頭、まず娑婆の大地が裂け、まさに宇宙大の七宝の大宝塔が涌出して、靈鷲山の上の空中（アンタ

然し、それには大変な条件を必要とした。いわゆる十方分身の諸仏、ならびにその眷属の菩薩たちをも悉く、この会座に集めねばならない、という条件であるしかも、これらの諸仏を集めるためには、天上天下もひつくり返るような、大奇瑞がなされねばならなかつた。即ち「三變土田（さんべんどでん）」である。

この三愛土田とは、三愛、法界くまなく清浄にする
ことであつて、このことは釈尊の神通力によつてなされ、天人をはじめとする地獄・餓鬼・畜生という六道界のすべてのものは、悉く他土へうつされて、通一仏土の様相が現せられ、そこへ釈尊の召還によつて、やがて無量無邊の十方分身の諸仏、ならびにその眷属の菩薩たちが来集する。

ここにおいて、はじめて釈尊の手によつて多宝塔が

開扉されるが、開扉された宝塔の内には、「糞子座ノ上ニ枯槁セル足肢、散ゼザル全身ヲ以ツテ……」
という、K氏の訳語を借りるならば、そこには、「萎（な）え乾（ひ）からびながな、なお凝集して散することのない、ミイラのような体」

という多宝如来の姿があり、しかも悠久の過去に滅度したという此の仏が、

「ゼンザイ、ゼンザイ」

と言うのであるから、一会の大衆も、さすがにドギモをぬかれる。

こうした中にあつて釈尊は、多宝如来の諸いにより宝塔の中に入りて二仏並座の儀相を整え、つゞいて一會の大衆も悉く、釈尊みずからの神通力によつて空中に住せしめられ、いよいよ虚空会の説法（実は、まだ此處では空中会）が展開されて来る。

さて、この章の前半のあらましは、以上の如くであり、それに対する解説も少くはないが、それらの意見を参考に、少々私なりの解釈もさせて頂き、以下各章においても、同様な態度をとらせていたゞくつもりでいるが、詳細に述べることは、紙数の都合上、無理なことなので、以下結論的に述べてみることにする。

まず、宇宙大の多宝塔の出現は、仏滅後における本尊論争、即ち仏舍利供養と經卷供養との対立、（それ

は法華經の第十章法師品の中にも、既に、不須復安舍利ーまた舍利を安ずることをもちいすーと述べられていてことによつても、その一斑をうかがうことが出来るものであるが) そうした対立と、形式に固執して枯渢し行く仏教全体に対して喝を与え、仏塔礼拝の

形式的信仰を打破すると共に、仏塔儀式の如何よりも精神的内容、本来の信仰態度への復活を成そうとしたものと推量される。

即ち多宝塔が宇宙大のものであるということ自体、既に從来の仏塔形式にとゞまらずして、むしろ精神内容を象徴しており、宇宙的精神であるはずのものが、なお多宝塔という仏塔の形式で象徴されているところに、この多宝塔によつて、仏滅以降における仏塔供養と經卷供養の対立を、開会しようとした意図を、うかがうことが出来よう。

宝塔(及び多宝如來)が、娑婆の一切衆生に有縁であり、その有縁の度合いは、娑婆の教主である久遠の本仏教尊には及ばずとも、他の一切の分身の諸仏にくらぶれば、はるかに深厚であることを象徴している。

多宝如來という、その名称は、梵語のプラブーラタナで、「宝多き」即ち「多くの法寶(教法)」といふ意味であり、この特異な名称と、法華經成立の時代から類推されることは、法華經成立以前の一切の諸仏・諸菩薩、そしてその教法・行法・信仰・思想等々のすべてのものを統一する意義をもつと共に、永劫寂滅・全身舍利という、その異様な姿は、それまでに釈尊の真実の法門の、未だ明かにされていなかつたことを象徴して、久遠の本仏教尊への媒介体の役を果してい

次に多宝塔が、娑婆の大地より出現したことは、多

また十方分身如來というのは、各時代、各處におけ

る仏教各団、分派の仏陀觀を意味するものであつて、従つて分身如來の虛空会來集は、とりもなおさず一切の仏陀觀の統一であり、驚天動地の三変土田は、六道なき淨土を顯現せしめ、空間的な制約をはずして、限りなき無邊の仏界を暗示し、更に二仏並座は、釈尊が分身如來の來集をもつて始めて開扉出来た未見・未聞未曾有の多宝如來よりも、右の上座に坐ることによつて、釈尊の至上の尊嚴を象徴し、一会大衆の仏陀觀を一新せるものである。

宝塔品の一連の儀相は、以上述べたように、すこぶる重要な意義をもつものとして、法華經二十八章中、述門の第一章ではありながらも、実は虛空会の始めの第一章として、軽視すべからざるものがある。

蓋し、以上の如き考察は、観心あるひは信仰より離れた、成立史的な考察という嫌いがないでもない。事実、日蓮宗門の中でも、

「多宝塔ならびに多宝如來は、靈界あるひは四次元において実在するもの」

と確信している人々が、なお非常に多い。

そうした人々は、かゝる考察に対しては、むしろ法華經を冒読し、信仰を崩壊せしめるものとして、強い抵抗を覺ずにはおられないことであろう。

然し、そういう人々の固執こそ、曾つて法華經が、その成立當時において、喝殺してやまなかつたところの形式偏重主義と類を同じくするところに堕ち入つてゐるものではあるまいか。

なるほど法華經が成立した当時の時代背景と、今日の時代背景とでは、比較にならないほど相違している一例をあげれば、今日においては、宇宙大の多宝塔を大地を割つて涌出せしめねばならないほど、切実な本尊論争（仏塔供養と經卷供養との対立）といったような類のものはない。

むしろ現代は、そうした切実な本尊論争の起る余地

もないほど物質化しており、多宝塔の涌現は、さながら昔の夢物語の如く思われがちになつてゐる。

では法華經は、既に過去のものであり、今日では呪的な信仰の具にすぎないものであろうか。

いや、そうではない。法華經がその成立當時、叫んでやまなかつたものは、久遠の本仏釈尊を本尊として

確立し、その本仏釈尊の一念の中に、一切を開会し、悉皆成仏の運を開くことについた。しかも、その精神こそ、法華經成立當時よりも、むしろ現代に、より切実に求められねばならないはずのものである。

こうした法華經の根本的立場に立脚する限り、今こそ法華經を、即物的な信仰より脱皮して、一切開会の思想信仰として、普遍し演説して行かねばならない。

法華經は、一時期を通して一挙に成立したものではない。少くとも三期以上の時代を経て、はゞ現在のものに近い形が出来た、とされてゐる。

宝塔品以前の各章が、その原形であり、第二期に成立したのが、宝塔品以下神力品までの大部分であり、

学形の理的立場を基礎に、事相としての極みを示すのが、虚空会の説法であり、かゝる意味あいからも、宝塔品をその起点として、虚空会は重要な意義をもつものである。

このように考えて来れば、多宝塔ならびに多宝如来というものを、凡夫の知見では計り難い靈的な存在とのみ見なすこと自体、形にとらわれた偏見固執の危険をはらみ、却つて多宝仏塔出現の真義を見うしなう恐れがないとはされない。

多宝塔が宇宙大であるということ、それはむしろ宇宙 자체が多宝塔である、ということを物語るものにはかならないが、然しそれでも、その限りにおいては、宇宙がそのまゝ眞の仏國土というのではない。若し、そうとするならば、所詮、真言の淨土觀と何ら変りは

ないであろう。

そこで、次に三寶土田が行われ、六道なき淨土が顯現される。然しそれでも、未だ真の淨仏國土といふことは出来ない。

こゝに、無量無邊という十方分身の諸仏、ならびにその眷属の衆が起る。然しそれでも、未だ真の仏國土といふことは出来ない。

そこで釈尊が、多宝塔の内で二仏並座し、更に法華經第十五章において六万恒河沙の地涌の菩薩が出現し第十六章の如來壽量品において釈尊みずから、久遠の本仏であることを明かにすることによつて、こゝにおいて、はじめて宝塔と莊嚴された大宇宙そのものが、本仏釈尊の一念の中に、本國土妙の大マンダラ仏界として現成される。

この時、見宝塔品の空中（アントリーケンシヤ）は、眞の虚空（アーカーシヤ）となつてゐる。

いふなれば多宝塔の出現は、從来の仏教學派や宗派によつて信じられていた娑婆世界以外の十方淨土觀に對して、

「そういう淨土は、方便の淨土である」

ということを指向していたものといえよう。然しそれも指向の範囲を出ないものであつて、眞の淨土は釈尊の久遠開願によつて、はじめて完成される。

この時、多宝如來は、十方分身の諸仏と久遠の本仏釈尊との媒介体の役をおえ、東方宝淨世界の教主として、娑婆世界において法華經の受持宣布されるところ須臾にも飛び來つて、その道場を莊嚴し、その說法を聴聞し、そしてその眞実を證明する、という本誓願へ帰るのである。

次は、第十五章の從地涌出品の項について、述べてみることにする。

△以下次号△

身延の近郷に

日諦上人の名瀑をたずねて

醒悟園本妙庵の行学研修会中

早稲田大学経済科二年 秋元忠

1



日諦上人の滝と
修行中の秋元保男君
(高校三年生)

驚峰会の第五回行学研修会は、
八月十七日午後一時より二十日の
夜半まで四泊四日間、波木井山頂
の醒悟園本妙庵で開かれました。

それは、八月二十一日より始ま
る三泊四日間の第八回身延山青年

行学講習会の直前のことでした。

私は、弟の保男（高校三年生）と共に東京から、つれだつて此の両講習会に参加しました。

このたびの参加は、春の講習会に参加することが出来なかつた、め、昨年の夏以来一ヶ年間、待望し切つていたものでした。

私たち兄弟の、東京における日常生活は、学校の勉強を除けば、家事を手伝うこと、御宝前で唱題修行をすること、そして夜、父や母を中心に、食卓をかこんで法華經の教えや日蓮大聖人の教えを研究したり、討議したりすることが主な日課でした。

その中で、最も楽しいことは、

いうまでもなく法門に関する意見を戦わせることでした。

専門の学者からみれば、それはあまりにも幼稚な討議であつたことかも知れません。然し、幼稚は幼稚なりに私たちにとつては信仰上、真剣この上もないことでした

討議中、意見が一致すると、手

を取りあつて喜びあい、若し、意見が食い違うと、身延の講習会で教わつたことや、「みのぶ」教報驚峰誌、或はお小遣いで買ひ込んだ各種の仏教参考書などをそぼき出しては、文証を示しながら

のは何時ものですが、つい時間のたつのも忘れて、法論夜半に及ぶことも、再三のことではありますでした。

はじめの中は、近所の人が、兄弟喧嘩でも始つたかと思つて、仲裁に入つたという笑い話も残つているほどです。

今では「秋元の法華經一家」といつて、近所でも通つていますがこうした法門討議の中で、一番むづかしく思われたことは、何といつても「事の一念三千」という法門の中の「仏界所具の十界」ということでした。

聞くところによれば、日蓮大聖人の宗教は、この「仏界所具の十

界」から始まるのだそうです。

たのでした。

2

このため、弟の保男にいたつては、法華經二十八品の經典を通説するが、三度の飯よりも好き、といつたふうでした。

然し、これほどの大法門が、在家初心の青年にとつて、どうして解決されるはずがありましよう。

結局、未解決の問題は、次の身延の講習会に参加した時、講師の先生たちにおたずねしよう、といふことで保留されていたのです。

日課の午前中が講義、午後は土方（薪を割つたり、土を運んだり草とりをしたり）そして夜が座談会。

こうした四泊四日の研修中、最たまつた多くの疑問をかゝえて、その解答を得ることを楽しみに、まず本妙庵の研修会、これにつく身延の青年行学講習会に参加し

した。

本妙庵の学生僧は、京都・大阪名古屋・瀬戸・小牧・津島方面の街頭布教後、更に身延の祖廟より東京の池上本門寺へ、弘安五年九月、日蓮大聖人が歩かれた聖路をたどつて擊鼓行脚をされ、更に八月六日の原爆記念日に、爆心地広島までも擊鼓したばかりであつただけに、そのお供をして滝の修行に行けたことさえ、何かしら尊い余香にあづかつたような思いがしたものでした。

さて日諦上人といえば、警鐘本誌（昨年四月号五十九頁）明治の傑僧山本日諦上人伝に、その生涯の概要が紹介されていますの

で、いまさら申すまでもないことが
ですが、一口にいえば京都深草の
鷲峰院元政大和尚の流れをくむ本
妙日臨大和尚の遺鉢をついだ明治
の傑僧で、宗門最後の律僧でした
青年時代、身延に登詣し、本妙
律師の遺風を慕つて、律師が曾つ
て修行したことのある七面山の裏
麓の雨畠の滝に、身命をかけた苦
修練行を志しました。

ところが、この一帯には、既に
俗風が入つていたため、こゝを立
ちのき、縁あつて内船より約一里
ばかり山へ入つた人跡未跡の倉ヶ
平の滝にこもつたのです。時に上
人若冠二十六才の春のことでした
この修行は悽烈をきめました。

ですが、一口にいえば京都深草の
鷲峰院元政大和尚の流れをくむ本
妙日臨大和尚の遺鉢をついだ明治
の傑僧で、宗門最後の律僧でした
青年時代、身延に登詣し、本妙
律師の遺風を慕つて、律師が曾つ
て修行したことのある七面山の裏
麓の雨畠の滝に、身命をかけた苦
修練行を志しました。

伝えるところによれば、寒中、滝
にうたれながら意識不明になつた
日誦上人が、合掌したまゝ河しも
へ流され、里人に発見されて、は
じめて人気もない山の中の滝で修
行していた人のいたことが知れ渡
つたということです。

上人が此處で修行中、時代は幕

末から明治と変り、やがて国民の
戸籍法が制定されました。

然し上人は、

「出家の身なれば俗籍は有せす。
これにそむくは仏道にあらず」

と頑強に主張したため、獄に投

ぜられ、やがて山梨県令によつて

所払いとなり、延々長蛇の列をな

して泣き悲しむ村人と別れて、八
寺門の内には、

「貰首さまとあらうに、乞食の
ケ年齢修行した滝をあとに、故郷
北九州の八幡へ帰り、こゝで龍潛
寺を建立し、龍潛寺を本として近
県近郊を布教しました。

今日、北九州および山口県下大
半の日蓮宗寺院は、殆ど上人の開
教にもとづくものといわれていま
す。

後年、日蓮宗管長（身延山法主
新井日蘿上人）一本妙律師の孫弟
子）の特選により、大本山小湊の
誕生寺の貫首となりましたが、貫
首となつても毎日の街頭擊鼓宣令
を欠かしたことはありませんでした。

ようなまねをして……」

と批難する者も少なくはありませんでした。

然し、こうした上人の訓陶をうけた若い弟子の中に、後年、宗門名管長とうたわれた酒井日慎上人という大人物が輩出されたのです。

若し、酒井管長の青年時代、日諦上との邂逅がなければ、おそらく今日の酒井管長はなかつたことであろう、とまで言わてもいいほどです。

日諦上人は龍潛寺で御遷化になり、そのお墓は龍潛寺本堂の横に建てられていますが、現在の龍潛寺住職松尾周輝上人と、本妙庵の

日高白象上人とは大学時代より親交があり、今日驚峰会の九州街頭布教の際、その主力となつて協力を惜まないことも、たとえば古い不思議な、そして尊い因縁ごとをありますよう。

3

さて私たち一行は、本妙庵の学生

として誠に文字通りの名鑑でした。

生憎につれられて波木井の山をくだり、身延駅より電車に乗つて二つ日の内船（うつぶな）駅で下車。それより道中一里あまり、擊鼓の法音をともろかしながら、倉ヶ平

滝へと急ぎました。

道はハイヤーも通れるほど開けていましたが、途中人家は少く、

田舎道を直射日光に照りつけられ

ながら、汗ダク／＼になつて靈跡

は、およそ二丈あまり、見あげる

ほど高く、水は涓々として落下し滝音は耳を聾し、あたりに迫る霊氣は、凡夫の身心をたちどころに

一新せめずにはおかぬばかり；

これは思えない立派なお堂がありました。それは釈迦堂でした。内陣正面には立像の釈尊像、その左右には日蓮大聖人と日諦上人の御尊像が安置されていました。

これほどの名瀑に釈迦堂があるということは、何という感激でし

よう。

普通一般の滝では、龍神や不動明王や、その他いろいろな守護神が祭られているのに、さすがに日諦上人の滝、本仏釈尊が中央に巖として安置されていたのです。

本妙庵の研修会では、日夜、大聖人の本尊觀、久遠完成の本仏釈尊を本尊とすべきことが、徹底的にたゞき込まれていただけに、一行の感激は一入のものではありませんでした。

「有難い／＼」

一人／＼が連発していました。

その後、私たちは夕方になるまで、何度も／＼も滝にうたれて修行しました。

さて祝迎堂で、お堂もゆるぐば

かり擊鼓唱題修行をしていると、お滝の世話人という人が、部落から駆けつけてきました。

私たちが、

「身延の青年行学講習会に来て、今、本妙庵で修行中である」

というと、世話人は大喜びして走してくれました。そして、「部落をあげて歓迎するので、何時でも修行に来てくれ」ということでした。

といふことでした。

日高上人より色々と教わっていたのですが、はじめの中は、教えられたようには出来ず、滝の大自然の威力にのまれてしまったり、或は抵抗しようとしたりしていましたが、何回か回を重ねる中、滝の走り返し、間もなく野菜の煮しめたものを沢山もつて来て、御馳走してくれました。そして、走りにのまれることもなく、流れに流れながら、しかも流れず、ひたすら仏天を急じて、滝の轟音と共に、朗々と唱題出来る呼吸をつかみ得たかのようでした。

滝を辞して内船駅についた頃、夏の日もとつぶり暮れ、擊鼓して波木井の山を登り、本妙庵についたのは、既に夜九時をすぎていました。

おせい夕食を食べる時、日高上人が申されました。

「滻にうたれる時、煩惱の核である自我を、打たれる水に流せ。唱題の声に乗せて、身心を十方虚空に散せよ。」

自我が空となるのを恐れるな。

念するところが本仏教尊の大慈悲心ならば、自我を散じ尽したところに、未だ経験することもなかつた自己」本来の姿があらわれて来るこれこそ仏界所具の自己」一身である」

5

日誦上人の滻へ修行に行こう

と語りあつていました。

私たち兄弟も、月に一度はお供したいのですが、東京の学校へ行つてある以上、それも不可能なことです。

せめて学校の休暇中、本妙庵の研修会に参加した時でも、是非この滻で再び修行をし、大マンダラ仏界中の自己」創造へ向つて、更に精進の橋頭を加えて行きたいと、兄弟して誓いあつたことでした。

おことわり

一、自我偈講義

一、靈鷲山と身延山

一、京都・大阪・名古屋・瀬戸・小牧・津島方面における身延山街頭布教紀行

一、弘安五年の日蓮大聖人の聖路をたどる身延・池上間の擊鼓行脚布教紀行

一、読者の声

右は紙数の都合により、次号へ廻したことを、謹んでお断り致します。

△編集部▽

「これを契機に、今後毎月一度は



信 仰 上 の 緊 張 感

解 説 日 高 白 象

お た ず れ

一向に緊張感の起りようもなく、

充実した真剣な信行が出来ずにお

△どうも此の頃、信仰に緊張感が

足りない、抜けている。自分自身

もそうであり、周囲の人々もその

ようだ。これは一体どうしたこと

だろう。どうすれば張りつめた信

仰が出来るのだろうか▽

お こ た え

と何時も反省しているのですが

これには二つの道があると思ひます。その一つは、迫り来る自分

自身の生命の終末、即ち死を超克

して、永遠の生命に生きるという

ことであり、他の一つは、何時勃

発するかも知れない核戦争を回避

して人類の滅亡を救い、地上恒久

の平和世界を実現するということ

です。

いづれにしても、この両者は、

個人と人類全体という相違こそあ

れ、刻々に迫り来つているところ

の生存の危機をみつめるということ

と、そしてこれを克服して、永遠

の生命に住するということには変

りはありません。

しかも両者は、決して別々のも

のではなく、実は一つのものなのです。何故ならば人類の滅亡は、同時に自己の死をも意味するからです。

或る時、釈尊は仏弟子に対しても次のように諭められました。

「人間には三つの惰慢がある。一には青春に対する惰慢、二には健康に対する惰慢である」と。則ち釈尊は、青春や健康、そして生存そのものですが、何時までも統くと錯覚することによって起るところの心のたかどり、といふものを諭められたのです。

「臨終を習うて他事を習うべし」

とは、日蓮大聖人の有名なお言葉ですが、まこと人生の無常、自分自身のまねがれ難い「死」というものを、よくくみつめる時、

そこにはじめて今日に「生きる」在り方というものが、真剣に考えられて来るものです。

キリスト教では終末観といつて人類滅亡の時のおとずれることができます。予言されていますが、仏教でも末法観といつて、人類の永遠に救わ

れ難い時代の到来することが予言されています。

大聖人は、末法の時代こそ、本仏釈尊の本懐である法華経が宣布されるべきであるとして立ち上られたのでした。

現代は、人類をはじめ地上一切の生物までも一挙に潰滅せしめる核戦争が、何時勃発するかも知れぬ地上最大の危機をはらみ、末法の様相は大聖人当時よりも、より険悪に、より深刻になつて来ています。

この時代を救うものが、南無妙法蓮華経と我れも唱え、人を唱えしむる以外にないと知るならば、時が緊迫しているだけに、信行もまたより強盛にならざるを得ないであります。△おわり△

編集後記

鷲峰七八合併号

昭和四十年通卷第三卷第六号
第二十四号

定価五十円 送料十円

昭和四十年七月二十日 印刷
昭和四十年八月一日 発行

編集兼発行人

山梨県身延町波木井 醍悟園本妙庵

日高白象

印刷所 山梨県身延町梅平

藤田印刷所

發行事務所

山梨県身延町波木井三区四一二五

鷲峰会

振替(甲府)二〇九三番

★「正法の興らんとするや、三障四魔が憤然として競い起る」とは、よく言われることであるが、三障四魔や三類の強敵を恐れていては、何時になつても正法の興りようはない。★といつて、法敵を挑発するようでは、正法とはいわない。また迫つて来る法敵に対して、対抗するようなことでも、正しい信仰をもつてゐるとは言われない★「受難こそ我が過去の誇法の罪の償いだ」「法敵こそ我が身の罪を消滅してくれる善知識だ」と思い返して、感謝合掌礼拝するところに眞の仏法者の姿がある。★それは至難なことだ。然し、どんなに難かしいことではあつても、この心になつて、このことを行じなければ正法は興らない。★不自信生命を誓うならば、罪を人のせいにせず、人の罪をも、みずから我が罪と背負うことだ。★驚峰会の歩むべき道は崎しい。然し何如に崎しい道でも、懺悔と感謝を車の両輪として、たとえ一步でも半歩でも前へ進みたい。立正安國の道を……

△白塔△

誌代	半年分	三六〇円	(送料共)
一年分	七二〇円	(送料共)	
一年分	三〇〇〇円	(分納可)	